ウィズコロナ・アフターコロナ社会の道しるべ③

Ｐａｎｄｅｍｉｃ―ｒｅａｄｙな社会への再構築を

安宅和人慶応大学環境情報学部教授は、ヤフーのＣＳＯ（最高戦略責任者）としても活躍し、幅広い知見に裏打ちされた活動を展開する。アフターコロナを見据えた社会、自然災害に耐え得る街や道の在り方などを積極的に唱える。聞き手は日本みち研究所の松田和香研究理事。

著書『シン・ニホン　ＡＩ×データ時代における日本の再生と人材育成』では、さまざまな観点の分析結果から日本の現状への危機感が述べられています。この本は新型コロナウイルスの流行前に執筆されたものですが、コロナ禍を踏まえた現状に対してどのような感想をお持ちですか。

「コロナ禍という言葉自体があまり好きではありません。『下』なら分かりますが、『禍』は言い過ぎです。人類史を振り返ればペストや結核、天然痘、エイズは桁違いに危険な病気です。天然痘にかかると３～４割、結核は発症すると１割以上が死亡するといわれています。人口８・５億人以上が生きるアフリカのサブサハラ（サハラ以南）は、いまだに死因の１位がエイズ。既に３３００万人も亡くなっています。14世紀にペストがまん延したフィレンツェやロンドンは数年の間に人口の７～８割、ヨーロッパ全体でも人口の６割が亡くなりました。ＣＯＶＩＤ―19がこれらのレベルの感染症災害になる可能性は低いでしょう。危険なことは確かですが、歴史的に見ればフェアに評価されていないのではと思います」

感染症はなぜ発生するのでしょうか。

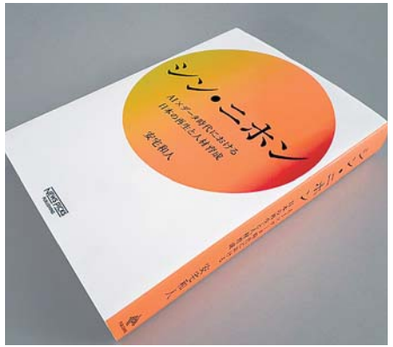
「現在、感染症が発生しやすい背景は大きく分けて二つあります。一つは地球上の大型生物の９割が人間と家畜になってしまい、人類と野生動物の生活空間の重なりが大きくなってきたことです。人類が野生動物に接しすぎているため、自然宿主からうつってしまいます。ＣＯＶＩＤ―19はコウモリ由来と見られています。エイズウイルス（ＨＩＶ）はＳＩＶ（サル免疫不全ウイルス）由来で、やはり野生動物からの広がりです。もう一つは温暖化が極めて進んでいること。氷土やツンドラが解けこれまで眠っていたウイルスや細菌が噴き出してくる可能性が高いと考えられます。感染症は今後もっと増えてくるでしょう。現にこの40～50年で感染症の発生は加速化していて、デング熱やエボラ熱、ＳＡＲＳ（重症急性呼吸器症候群）、ＭＡＲＳ（中東呼吸器症候群）など、今まで誰も聞いたことが無かった病気が大量に出てきています。背景には全てわれわれ人類の活動があります」

今回の社会的な対応についてはどうお考えですか。

「今回のＣＯＶＩＤ―19はまさに二次災害、三次災害という事態になっています。感染拡大を抑制するだけでなく、このような状況下でも社会システムやお金の流れだけではなく、行政や電気通信などのインフラ、土木工事などもそうですし、食糧供給なども回し続けられるかが問われています。そちらの議論がないまま、単純な表面上のシステム停止策をとったため、世界はおかしくなりました。行政システムあるいは社会システムは先に起こる課題を見込んで法律やルールをつくっているので、今回のような不連続事象が起きた時に対応できないのです。もっともここまで不連続なことが連続的に起きることも想定されていなかったのですが。不連続事象への対応策が社会的に強く求められているのに、古いシステムで無理やり回そうとしているので、めちゃくちゃになっていますね」

本質的にどのような対応をしていかなければならないでしょうか。

「Ｐａｎｄｅｍｉｃ―ｒｅａｄｙな社会にしておかなければいけません。冷静に考えればＳＡＲＳやＭＡＲＳのころからやっておかなければいけなかったでしょう。いずれにせよこのような感染症はまた来ます。今回のＣＯＶＩＤ―19さえしのげばいいと思っている発想や議論があまりにも多く、なぜこれが起きているのか直視していなさすぎます。こういう状況が多発してもおかしくない社会で、どのような未来を残すのかが今問われているのです。本質的な改変を行う良いチャンスだと思うけれど、今は思考の浅さと近視眼性が異常に広まっている気がします。ウィズコロナの状況においては、ＣＯＶＩＤ―19対応や基本コアシステム、ＯＳ的なインフラ機能、お金、ルール作りという五つの課題レイヤーと、それぞれに止血、治療、再構築というフェーズがあるはずです。目先の止血的な話は長くやるべきではありません。止血し過ぎると指だって死んでしまいます。再構築のフェーズ、つまり今起きている変化の本質的に即した系につくり直すことが重要です」。



「シン・ニホン　ＡＩ×データ時代における日本の再生と人材育成」。安宅氏が「日本の未来を変える意味のある一撃となることを願って」今年２月に出版した

安宅　和人氏

慶応大学環境情報学部教授、ヤフーチーフストラテジーオフィサー。イェール大学脳神経科学Ph.D.。内閣府総合科学技術イノベーション会議基本専門調査会委員、国土交通省i-Construction推進コンソーシアム企画委員会委員等を務める。

松田　和香氏

日本みち研究所研究理事（国土交通省から出向中）、博士（社会工学）。東北地方整備局磐城国道事務所長、関東地方整備局道路部道路企画官等を歴任。

～ 道路・交通イノベーションをめざして ～
一般財団法人 日本みち研究所
理事長　石田東生筑波大学名誉教授
（http://www.rirs.or.jp/）「みち研」で検索